

グループで有機農業に取り組み着実な販路拡大を実現

たなべじるし

田辺印の会（和歌山県田辺市）

平成27年12月に世界農業遺産「みなべ・田辺の梅システム」として認定された紀南地域で、構成員全員が有機JAS認証を取得し、有機農産物の販路を拡大

地域の特徴と取組の背景



満開の梅園

- ・ みなべ・田辺市は、和歌山県南部に位置し、全国の梅生産量の6割近くを生産している和歌山県において、県内梅生産量の約7割を占めている梅の一大産地
- ・ 養分に乏しい礫質の斜面を利用し、梅林の周辺に薪炭林を残すことで水源涵養や崩落防止等の機能を持たせていること、薪炭林に生息するニホンミツバチを利用した梅の受粉等、地域資源を有効活用して高品質な梅を持続的に生産してきたことが認められ、平成27年12月に世界農業遺産に認定された
- ・ 紀南地域における有機農業の拡大、地域の活性化を目的に、有機農業に取り組む農業者が集まって、平成20年に団体を設立。
- ・ 平成21年には全会員が有機JAS認証を取得し、集団で有機農業に取り組む

環境保全型農業の実施状況

【環境直接支払の対象活動】

主に梅（品種：南高）で自給堆肥による土づくりを基本として有機農業の取組を実施し、平成27年度は18haで取り組む



有機JAS認証の梅

自給堆肥づくり

【環境直接支払の推進活動】

- ・ 出荷・販売に関する検討会や有機農業に関する勉強会を開催して構成員の技術向上等に努める



有機農業に関する勉強会

【その他の活動】

- ・ 消費者との交流会を開催して有機農産物への理解を深め、販売促進につなげている

【農業者の組織する団体等の概要】

- ・ 構成員 農業者16名

【H27年度の取組】

- ・ 対象作物 果樹（梅、柑橘類）
- ・ 対象活動 有機農業
- ・ 取組面積 18ha

取組の効果及び今後の展開

- ・ 構成員から集荷した有機農産物は主にJAを通じて梅酒メーカーや生協を中心に販売するほか、直売所や小売店にも販売
- ・ 食の安心や健康に意識が高く、有機農産物に関心がある消費者から評判がよく、リピーターも多い
- ・ 年々販路が拡大し、平成27年度は平成22年度に比べ2.7倍の販売額に増加



出荷の様子



構成員

- ・ 今後も紀南地域にあった有機栽培技術の確立と経営の安定化に加え、消費者との交流、地域活動への参加、熊野古道の道普請等にも取り組み、「面白くやっついこう」の精神で活動を展開

「環境にやさしい農業」の実践により、 ホタル舞う農村風景を次世代の子供達へ

その他の自然環境の保全

ほうじちく 方地区資源景観保全活動組織（鳥取県湯梨浜町） ゆりはま

湯梨浜町のシンボルでもある「東郷池」の水質浄化や、将来を担う子供たちに「安全・安心な米を食べてもらいたい」との思いから、県内でもいち早く減農薬・減化学肥料による水稻栽培に取り組む

【農業者の組織する団体等の概要】

- ・ 構成員 57名（うち取組農業者 24名）
（農業者52名、子供会、女性会等5団体）

【H27年度の取組】

- ・ 対象作物 水稻、大豆
- ・ 対象活動 カバークロップの作付け
- ・ 取組面積 15.8ha

地域の特徴と取組の背景

- ・ 湯梨浜町は、鳥取県中部の日本海に面しており、そのほぼ中央に位置する方地区は、古くから水田稲作と二十世紀梨の栽培を中心とする農業地域である



町のシンボル「東郷池」

- ・ 湯梨浜町のシンボルでもある「東郷池」の富栄養化による水質悪化等の環境問題や、食の安全性への懸念から、地域の有志で組織を設立し、減農薬・減化学肥料による水稻栽培の取組が始まった
- ・ 安全・安心な米づくりが、子供たちへの美味しく安全な食材提供に繋がり、結果として古き良き農村風景を守っていくことになる、との思いから地域が一体となった取組を展開

環境保全型農業の実施状況

【環境直接支払の対象活動】



カバークロップ（レンゲ）の作付け

- ・ 平成19年に水稻のエコファーマー認定を受け、（H25には大豆のエコファーマー認定）、カバークロップの作付けと合わせ、減農薬・減化学肥料による水稻栽培の取組を開始

【環境直接支払の推進活動】



方地川での生き物調査

- ・ 子供会との生き物調査等を通じて、環境保全型農業への理解を深める活動を実施

取組の効果及び今後の展開

- ・ 減農薬・減化学肥料の取組と合わせ、水田からの濁水流出を抑えるため「浅水代かき」等の取組を行ってきた結果、東郷池に注ぐ地域内の方地川において、一度は農薬等の影響で数が激減していた「ホタル」が年々復活
- ・ 現在では、地域主催による「ホタル観察会」が開催されるまでになり、町内外から見学者が訪れている



「浅水代かき」の実践

- ・ 今後も、子供会との生き物調査などを通じて、次代を担う子供たちに環境にやさしい農業への理解を深めてもらうとともに、将来的には特別栽培農産物認証を取得し、地域ブランド化を図っていくことも検討

そうじゃ有機の郷

（うち有限会社吉備路オーガニックワーク）（岡山県総社市）

有機農業を「生計を立てるための農法」として持続可能なものとするため、自ら確立したニンジンの大規模機械化一貫体系により、おかやま有機無農薬農産物及び有機JAS農産物の生産を拡大

地域の特徴と取組の背景

- 総社市は岡山県の南西部に位置し、温暖な気候と高梁川の豊かな水に恵まれ、水稻を中心に麦、大豆、果樹、野菜、畜産などの幅広い作目経営が行われている



有機ニンジンの栽培ほ場

- （有）吉備路オーガニックワークは、有機農業を「生計を立てるための農法」として持続可能なものとするため、機械化・規模拡大に適した品目（ニンジン）の絞り込みと機械化の推進により、大規模機械化一貫体系を確立し、高品質・安定生産を実現したことにより、販売先からも大きな信頼を得ている
- 平成27年度からは、同法人が中心となり、同じ有機農業を実践する農業者と「そうじゃ有機の郷」を組織し、活動を展開

環境保全型農業の実施状況

【環境直接支払の対象活動】



吉備路オーガニックワークのニンジン

- ・ 水稻（3.7ha）、ニンジン（2.3ha）を中心として、大豆、ほうれん草等の野菜等で有機農業の取組を実施

うち、（有）吉備路オーガニックワークではニンジン、水稻、大豆に取り組む

- ・ 構成員全員が有機JAS、おかやま有機無農薬農産物の認定を取得

【環境直接支払の推進活動】

- ・ 推進活動として、技術検討会を開催して構成員の技術向上に努める



農業高校の視察の受け入れ

- ・ （有）吉備路オーガニックワークとしては、農業高校や就農希望者等からの研修の受け入れ等を通じて、有機農業の普及や理解を深める取組を展開

【農業者の組織する団体等の概要】

- ・ 構成員 3名（農業者2名、法人1社）

【H27年度の取組】

- ・ 対象作物 水稻、野菜、大豆等
- ・ 対象活動 有機農業の取組
- ・ 取組面積 8ha

取組の効果及び今後の展開

- ・ 化学肥料や農薬を一切使用しない「おかやま有機無農薬農業」の認証面積は岡山県内最大級であり、他の有機農業実践経営体の模範として、県内の環境保全型農業（有機農業）の発展に大きく貢献している



収穫機によるニンジンの収穫作業

- ・ 今後も、近県の有機無農薬産地との情報交換等を行いながら、一層の低コスト化、高品質化を図るとともに、「そうじゃ有機の郷」の活動を通じて地域での活動の輪の拡大を図る

※「おかやま有機無農薬農産物」：岡山県独自の認定。有機JAS規格をクリアした上で、農薬・化学肥料を一切使用せずに生産された農産物

アイガモとのふれあい、農作業体験交流を通じた 環境保全型農業への理解促進

消費者等との交流

きくがわ

しものせき

菊川町レインボー稲作研究会（山口県下関市）

アイガモによる除草を活用した有機農業を中心に、様々な栽培技術の試行・導入により化学肥料・農薬の使用を低減した米作りに取り組む
また、地元園児や消費者への農業体験・交流を積極的に行い、環境保全型農業への理解促進に取り組む

【農業者の組織する団体等の概要】

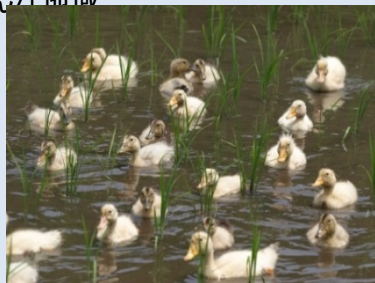
- ・ 構成員 農業者11名

【H27年度の取組】

- ・ 対象作物 水稻
- ・ 対象活動 有機農業、カバークロップの作付け
- ・ 取組面積 7ha

地域の特徴と取組の背景

- ・ 菊川町は下関市の東方に位置し、ゆるやかな山地に囲まれた盆地に位置する、
水稻を中心とした土地利用型の農業が盛んな地域



本田を除草中のアイガモ

- ・ 平成4年に現取引先から、「安全でおいしいお米が欲しい」との要望があり、町内の生産者から希望者を募り当研究会を設立
- ・ 平成5年から化学肥料・農薬を使用しない、アイガモによる除草を活用した有機農業に取り組む
- ・ カバークロップの作付けや堆肥の施用による土づくりに努め、全会員が温湯消毒により化学合成農薬不使用の種子消毒を実施。また、アイガモ田以外では、米ぬか散布による抑草技術を導入

環境保全型農業の実施状況

【環境直接支払の対象活動】

- ・ アイガモによる除草を活用した有機農業に取り組む(3ha)
- ・ また、有機農業以外では、カバークロップに取り組み(4ha)、化学肥料・農薬の使用を低減した米作りを実施している
(平成15年に全員がエコファーマー認定取得)

【環境直接支払の推進活動】



本田にアイガモを放つ園児たち

- ・ 毎年6月中旬にアイガモの雛を本田へ放鳥する際には、地元の園児を招いて動物とのふれあいや環境保全型農業への理解促進を図っている
- ・ 毎年10月中旬の地域イベント「小日本ぶちうま鍋」には、アイガモ肉を提供し環境保全型農業のPRを実施

取組の効果及び今後の展開

- ・ アイガモの雛の放鳥を通じた地元園児との交流は、地元メディアに取り上げられ、環境保全型農業への理解促進につながっている
- ・ また、周辺の農家も環境保全型農業への関心が深まり、畦除草に農薬を使用しない農家が増加



消費者との意見交換会

- ・ 近年は、座談会等を通じた会員募集により新規会員が加入する一方、高齢化により退会される方もいるため、地域外の加入希望者の受け入れを検討するなどして、生産量の維持・拡大に努める
- ・ また、地元園児や消費者等との交流を継続し、環境保全型農業の理解促進に努める

地域の企業と連携して地下水の保全に取り組む

南阿蘇村環境保全農業推進協議会直接払部会 (熊本県南阿蘇村)

「地下水を守るんだプロジェクト」の取組をとおして「水田を守る」と「地下水を守る」を実践し、生産された米は安全・安心な「地下水保全米」として企業と連携して販売し、地産地消を積極的に推進

【農業者の組織する団体等の概要】

- ・ 構成員 農業者129名

【H27年度の取組】

- ・ 対象作物 水稻、野菜他
- ・ 対象活動 冬期湛水管理、有機農業他
- ・ 取組面積 186ha

地域の特徴と取組の背景



南阿蘇村から
見える阿蘇山

- ・ 南阿蘇村は、カルデラの南に位置し山林地帯を含む高原地域。「日本名水百選」に選定されている白川水源など豊かな自然環境に恵まれ、夏季の比較的冷涼な気候を活かした多彩な農業生産が行われている
- ・ また、水道水源のすべてを地下水で賄う村として地下水の保全に取り組む
- ・ 平成22年には、生産者と村内の商工業者で農業と観光の持続的な発展及び豊かな村民生活の実現を図っていくことを目的に協議会※を設立
- ・ 協議会では、「地下水を守るんだプロジェクト」として地下水保全のために水田の年間通しての湛水や村営の有機肥料生産センターを活用した堆肥の利用等を推進
- ※ 環境直接支払については、協議会構成員のうち取組農業者で部会を設立して申請

環境保全型農業の実施状況

【環境直接支払の対象活動】



冬期湛水管理

- ・ 「地下水を守るんだプロジェクト」の一環として冬期湛水管理に取り組む(74ha)
- ・ 地域に畜産農家が多いことから、自家堆肥や有機肥料生産センターが供給する堆肥を活用して有機農業(53ha)や堆肥の施用(30ha)等に取り組む

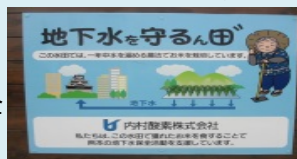
【環境直接支払の推進活動】

- ・ 地元大学の教員を講師として環境保全型農業に関する勉強会を開催

【その他の活動】

- ・ 地域の企業の協賛を得てほ場に看板を設置し、地下水保全をPR
- ・ また、田植え・稲刈り体験を通して消費者や子供達と交流し、環境保全型農業の理解促進を実施

地下水保全
PRの看板



取組の効果及び今後の展開

- ・ 冬期湛水管理による水源かん養や堆肥を活用して化学肥料低減による環境負荷低減によって地下水を保全
- ・ 「地下水を守るんだプロジェクト」として冬期湛水管理を行った水田で収穫した米の一部を「地下水保全米」として企業が買い上げる取組を行っており、環境保全型農業の理解増進に繋げている
- ・ ゆるキャラ等を活用して周知・広報を行っており、今後も消費者等との交流の取組などによって環境保全型農業のPRを継続していく



協議会のゆるキャラ
(かなばあちゃん)



田植え体験

町ぐるみで自然生態系農業（有機農業）を実践し、 地域活性化につなげる

有機農業の取組拡大

綾町有機農業実践振興会環境保全型農業直接支払部会 （宮崎県綾町）

全国に先駆け、町ぐるみで進める自然生態系を生かした農業に取り組み、町独自の認証制度も活用しながら有機農業を推進

地域の特徴と取組の背景



有機農業の盛んな
錦原地区

- 綾町は、自然の摂理を尊重した農業を推進するため、昭和63年に全国初の「自然生態系農業の推進に関する条例」を制定し「有機農業の町」として、地域の環境資源との調和と共生を目指す環境保全型農業（自然生態系農業）を行っている
- また、自然生態系農業で生産された農産物は町独自の認証基準でランク付けする制度を設けている
- 平成元年に、町で進める自然生態系農業に関する各種事業を実施することを目的に有機農業者が集まって振興会※を設立
- 振興会では、町独自の認証制度を活用しながら、生産された農産物を直売所や大都市などに出荷し、有機農産物をPRしている

※ 環境直接支払については、構成員のうち取組農業者で部会を設立して申請

環境保全型農業の実施状況

【環境直接支払の対象活動】

- 部会の構成員は土壌の状況を判断しながら根菜類（ごぼう、人参）を中心に野菜を輪作で栽培（90ha）。水稻等の栽培にも取り組む

【環境直接支払の推進活動】

- 自然生態系農業で生産した農産物は町独自のランク別証票シールを貼って消費者等へ直接販売することにより、取組をPR



綾町自然生態系農業
合格証票（ゴールド）

【ランク区分：例】

（無化学肥料・無農薬の場合かつ
無土壌消毒剤・無除草剤の場合）

【A：ゴールド（金）】

・土づくり3年以上の農地

【B：シルバー（銀）】

・土づくり2年以上3年未満の農地

【C：銅（銅）】

・土づくり1年以上2年未満の農地

【その他の活動】

- 町で開催される「有機農業まつり」において主体となって即売会を開催し有機農産物の販売を促進

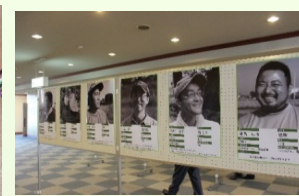


即売会の様子

取組の効果及び今後の展開



ふるさと納税の野菜セット



新規就農者の紹介

- 有機農産物のPR等により県内外からの関心が高まり、ふるさと納税の返礼品として有機農産物が選ばれる件数が26年度に比べて約3倍に増加
- 自然生態系農業としての町独自の認証制度を活用した販路開拓により都市部で「有機農業の町」としての知名度が向上したことや、即売会などの周知活動により有機農業への理解が進み、有機農業を志す新規就農者や地域の若手農業者が増加
- 今後は、これまでの有機農業者によって培われた栽培技術等の生産工程管理をデータ化し、地域の若手農業者などに継承することで、綾町全体のレベルアップに繋げたい

こだわりの自家製発酵肥料で先駆的に茶の有機栽培に取り組み、 地域における有機JAS認証ほ場の拡大を目指す

有機農業の取組拡大

ぬるき 有限会社塗木製茶工場（鹿児島県南九州市）

「病害虫に負けない茶園づくり」をテーマに自家製発酵肥料(ぼかし肥料)を使用した有機農業に取り組む
有機農業に取り組む茶園の団地化を目指して他の農業者への有機農業の普及に取り組む

【農業者の組織する団体等の概要】

- ・ 構成員 農業者17名

【H27年度の取組】

- ・ 対象作物 茶
- ・ 対象活動 有機農業
- ・ 取組面積 46ha(うち有機JAS認証14ha)

地域の特徴と取組の背景



南九州市の木となっている茶の畑

- ・ 南九州市は全国有数の畑作地帯で、茶、かんしょ等の作物を栽培しており、特に日本茶(緑茶)の供給基地として有名である
- ・ 当法人は、平成10年から地域内でいち早く有機農業に取り組む、「病害虫に負けない茶園づくり」をテーマに栽培管理を行う
- ・ また、土づくりのために発酵肥料(ぼかし肥料)を独自の配合で製造して全茶園に施用
- ・ 平成20年には、全構成員がエコファーマー認定を受け、県の特別栽培農産物に係る表示ガイドラインに沿った栽培を行う
- ・ 有機栽培茶の引き合いが強く、供給が追いつかない状況であり有機JAS認証面積の拡大を目指しているが、有機農業に取り組むにあたっては、周辺農業者から農薬飛散防止等への協力を得ることが必要

環境保全型農業の実施状況

【環境直接支払の対象活動】

- ・ 栽培する全茶園(46ha)において有機農業に取り組む
- ・ 摘採時期や耐病性等が異なる16種類の品種を栽培することで、病害虫の発生や凍霜害による収穫量の減少リスクを低減している

【環境直接支払の推進活動】

- ・ 有機栽培の方法や栽培計画等についての研修会を実施して生産技術の向上に努めている



理解促進のための
農薬飛散
防止看板
の設置

【その他の活動】

- ・ 農薬飛散防止の看板を作成し、設置するなどして周辺農家に対して理解促進の活動を実施

取組の効果及び今後の展開



消費者向けの商品

- ・ 有機JAS認証や特別栽培等による高付加価値化により年間を通して高値で販売(対慣行栽培比110%(H27))
- ・ 自家製発酵肥料による土作りを行った結果、慣行栽培を上回る収量を維持(対慣行栽培比150%(H27))
- ・ 「病害虫に負けない茶園づくり」を行っていくために研修会を継続し、今後は周辺農業者にも参加を促すなどの取り組みを進めることにより、有機栽培への理解を促進しながら地域内の有機JAS認証ほ場の拡大を目指す

宮古島亜熱帯有機農業生産組合（沖縄県宮古島市）

宮古島の貴重な地下水源を未来に引き継ぐため、有機農業によるサトウキビやマンゴー等の栽培に取り組む

生産されたサトウキビから糖蜜を作って販売するなど6次産業化を展開

【農業者の組織する団体等の概要】

- ・ 構成員 農業者5名

【H27年度の実績】

- ・ 対象作物 サトウキビ、マンゴー、野菜
- ・ 対象活動 有機農業
- ・ 取組面積 1.7ha

地域の特徴と取組の背景



宮古島市の様子

- ・ 宮古島市は沖縄本島の南西約290kmに位置し、島の南西の下地地区では、さとうきびを主体として葉たばこ、冬春期を中心に冬瓜、カボチャ、ゴーヤー、インゲン等の野菜が生産されている
- ・ 宮古島は透水性の高い琉球石灰岩で形成された島であり、雨水や農業用水が地下水となり、その地下水や湧き水が上水・農業用水の水源となっている
- ・ そのため、地下水源の保全のためには化学合成農薬や化学肥料の低減が重要と考えられている
- ・ 平成12年に有機農業に取り組む農業者が集まって、有機農業の実践のために組合を設立

環境直接支払の実施状況

【環境直接支払の対象活動】



下草を活用したマンゴーのハウス栽培

- ・ 主にサトウキビ、マンゴーにおいて有機農業の取組を実施
- ・ 全ほ場について組合として有機JAS認証を取得
- ・ マンゴーについては、下草を活用した冬期の地温低下防止等を行いハウス栽培している

【環境直接支払の推進活動】

- ・ 勉強会として構成員のほ場訪問を実施し、有用な農業資材、病害虫の防除技術及び新規導入作物等について意見交換

取組の効果及び今後の展開



糖蜜原料用さとうきび

- ・ 勉強会を開催することで構成員の地下水源の保全に対する意識が向上
- ・ マンゴーについては、県外に固定客ができるなど有機農産物としての品質が高く評価がされ、高単価で取引されている
- ・ サトウキビについては、糖蜜に加工して有機栽培のサトウキビから造った自家製の糖蜜として付加価値を付けて販売
- ・ 今後は、アボカド等について有機栽培に適した品種や栽培方法を実証しながら、取組面積を拡大していく予定